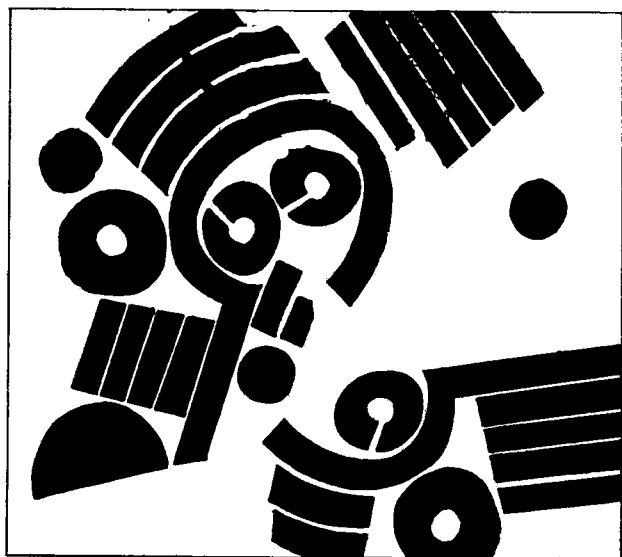


豊田善次

高橋和巳の回想



構 想 社

豊田善次（とよだ・ぜんじ）

昭和4（1929）年，大阪生まれ。旧制・天王寺中学，浪速高校を経て同29年，新制・京都大学文学部卒業。大阪府立高校国語教員。同42年から今宮高校勤務，現在にいたる。



高橋和巳の回想

一九八〇年十二月一六日第一刷発行

定価一三〇〇円

著者 豊田善次

発行者 坂本一亀

発行所 株式会社構想社

東京都千代田区神田錦町三ノ六

〒101 電話（三）三四一六六

振替口座（東京）一五五九三

印刷所 新陽印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替えいたします）

高橋和巳の回想・目次

第一章 良心的インテリゲンチヤ 6

第二章 飢餓戦術 67

第三章 微笑の彼方『捨子物語』 124

第四章 集团的思弁装置 148

第五章 我いま壮年への岐路に立つ 177

結び 祈り——あとがきに代えて 215

装
幀
田
村
義
也

高橋和巳の回想

第一章 良心的インテリゲンチヤ

プラトンの『ゴルギアス』の中で弁論家に向かってソクラテスが言う。

——ぼくの恋人は「哲学」、きみの恋人は「民衆」である、と。

恋人の望むがままに意見を変え、そのため民衆を墮落させる弁論家を鋭く衝いて行くのだが、ソクラテスの論理の背後には時代に対する絶望的な呪詛の念がひそんでいるように思われる。媚び諂って民衆に虚偽を説く者さえ結局は反対派の訴追を受けて追放される運命にあると言い、真実を説き続ける自分に待ち受けるものが何であるかを、ソクラテスはよく知っているのである。そしてこの古典は、高橋和巳が好んで用いたラディカルな結語にたどりつく。

——さらばよし、論理のみちびくところ、いずこへなりとも、行こうではないか。

高橋とはじめて会ってから三十年余、かれが東京へ去って十五年、そして十年以前にソクラテスと同じ壮烈な言葉を発してかれは死んでしまい、かれの書きのこした夥しい文章は、昔の友人であった私たちより若い世代の人びとに強く呼びかけている。かれがロゴスにみちびかれて何処へ赴こうとし

たのか、私には深く知る由もない。ただかれが、その形相的全体性において、言い換えれば、かれが認識しえたすべてのことを通して、あり得べき人間関係を地上に実現しようとする希求にみちびかれていたことは私にも了解できる。

昭和二十年八月十五日、息づまる死の君臨が取り払われて、太陽が異様にまばゆく感じられたとき以後、都会の廃墟もまたその相貌を変えたように思われる。それはたしかに殺戮の時代と狂気の思想の終りだったが、まだ何事の始まりでもなかったから、人間の痕跡も意味も失った瓦礫の曠野は、かえって空想と自由な冒険を許す壮麗な輝やきをもつように思われた時期がある。少なくとも私には、その時期のフナーキーな冒険がたのしいものだった。しかしそれも、人間的な意味系列が「歴史」という重々しい名ですぐに立ち返ってきて、人びとの恣意をものはや許さなくなってしまうまでであった。むろん高橋が言うように、「何事もなかったように」廃墟の上に日常生活の秩序を守り続けた大人たちの方が多かった。そのように振舞ってはじめて、世界は廃墟の上に徐々に人間的相貌を回復する。

戦後派文学とマルクス主義が、軽やかな遊戯を廃墟の上でたのしんでいた私たちに、歴史という課題を重苦しく提起したちょうどそのとき、私たちの青春がはじまっていた。歴史が私たちに突きつけた問いは、正義は実現されるか、理想社会は到来するか、そのためにいまは何をなすべきか、というもののだが、プラトンの時代よりも複雑に「哲学」と「デモス」の関係は入り組んでいて、若い私たちを悩ませたばかりでなく、時代に対する絶望的な呪詛も多かれ少なかれ私たちに共通なものとなった。

こうした問いに関して今言えることは、それが果して答えることのできる問いであったのか、というところである。ひょっとしたら、私たちはこの問いの成立不可能性の問題をめぐって青春時代を生き

てきたのかもしれない。

私が高橋についていくらかの事実を証言できるにせよ、かれがどんな内的必然性でこの問いに接近してきたのか、そもそも、かれがどこから来てどこへ行ってしまったのか、真に知っていたとは言えない。かれは死の直前にようやく、昭和二十年三月十三日の大阪空襲で焼け出されたあとの、四国への疎開と農村動員の断片的な光景を思い出して書き綴っていたようだが、私たちがかれに終戦体験を問いただしたときにもこんなふうだった。

小松 高橋はどこで（敗戦を）聞いた？

高橋 疎開先だ。放送は聞かなかったぜ。学校の帰りしなに……あの日晴れてたか。

小松 晴れてた。

小畑 東京はカンカン照りだった。

高橋 学校の帰りしな、誰かの所へぼーっとよって、それで聞いた。

小松 それで敗けたと聞いた時、どんな気がした。

高橋 帰りの道できいたんだと思うけどね、汽車通学してたんだが、何かあの日歩いて帰ったよ、その途中できいた。

豊田 高橋は何とも感じなかったか？

高橋 感じなかったな。

（一九五九・七・一二、対話の会座談会。小松実Ⅱ左京、小畑哲雄Ⅱあかし・ごろろ）

八月十五日、香川県の農村に、ひとりの異邦人が立っているという趣きがある。私は最初から、これのこういう不可解な面によって強く惹かれていた。

このごろ、高橋とはじめて話があった日の夢をしばしば見る。小高い森のような築山があり、裏側に廻ると姿は隠れてしまう。そのかげに並んで立ち、私たちはだまって、向うの兵舎のような建物の上の空が真っ赤に炎上しているのをながめていた。その夕焼けの下に、西に四〇キロ離れた大阪があることを、それぞれの思いとして噛みしめているのだった。私たちの身のまわりは、もうすっかり暮れ果てていた。かれがこうしてはるかな大虚を眺めつくすしぐさは、いつもあるはかなさと近寄りがたさを同時に感じさせ、今思い返せば、その印象は宇宙の彼方から来た人間のようなうたたとも言えるのだ。

昭和二十四年十月中旬、私たち新制京大一期生の間で、「文藝同好会」結成の檄に応じて二、三十人の者が集った。檄を書いたのは旧制浪速高校から来た唯貞三であり、私がかれをそそのかした。旧制三高の木造校舎の一室で唯と私が司会をしたが、どんな会をつくるか、雑多な意見をもてあました。收拾がつかぬまま校舎の外の陽だまりに出て車座になり、自己紹介、自己の文学上の抱負を語ることからやり直したのだが、その会合で私が、自分の趣味とはいささか別個に、「バルザックのように大長篇群を書きまくりたい」ということをぶち上げたのに対し、高橋は非常にもの静かにではあるが、「バルザックのような全体小説は戦後派文学の目指すものだ。自分はそういう小説を書くことを目指している。自分の身辺の出来事を告白的に書く従来の日本の私小説はもう古い」という趣旨のことを、はじめ説得的に、終りは断定的な口調で述べたのである。当日の会で、方法論にもわたって首尾一貫

した考えを説明できたのは、かれ一人だった。黒ぶちの眼鏡がよく似合う上、パイプをくわえて悠然とふかしていた高橋はひどく大人びて見え、一座の者に強い印象を与えた。しかし、何より強い印象を与えたのは、かなり強烈な意見を吐いているかれが、絶えず頬に浮かべていた何者へとも解しがたい無表情ともとれる微笑だった。それは心優しく高貴に感じられるとともに、人を不安に誘うようなものだった。

（この日、高橋は黒の詰襟姿だったと三浦浩が言っている。私は、かれが薄い色のセーターに目立たない色の背広を着ていたと記録している。記録していると言っても、私は自分の記録を必ずしも信用していないのである。）

その日の会合は、会の名称を何にするかでまとまりがつかなくなり、次回を約して解散したあと、高橋は正門前の築山のところで私を呼びとめ、私たちはそこでずいぶん遅くまで話しあった。

私がある日高橋に話したのは、その前年から首を突っ込んでいた「大阪詩人集団」のことであり、その無茶苦茶でアナキスティックな空気のなかから汲みとってきた、いくつかの、当時の私にさえ確とわからなかった奇妙な観念であり、そこからふくらんできていた小説の構想であった。当時の熱っぽい、虚仮おどしをまじえた語り方は思い起すすべもないが、今それを整理して書けばこうである。小野十三郎に『渺かに遠く』という詩がある。

渺かに遠く

それは対岸に煙っている。

誰もまだあそこには到達したものはない。

暗い海と 枯れた葦原の

あすこにゆこう。

私は長生きして

きつとあすこにゆきつくつもりだ。

そう書いた後、小野さんはその場所を「いやにしずかな息づまる世界だった」と結ぶ。

小野さんの詩集『大海辺』は昭和二十一年、『詩論』は二十二年に出ている。その当時和歌・俳句も作っていて、心情的にはヒトラーに、それも敗戦後急に心酔して国家社会主義者を気取るとともに、雑多な想念も仕入れて、秩序崩壊傾向の気安さに、軽やかな否定性の遊戯とでもいった少年の日を過ごしていた私に、小野十三郎体験とでも呼ぶべき強烈な衝撃を、それらの本はもたらした。戦時中に出了た『風景詩抄』のこの作品にぶつかっただのも同じ頃である。敗戦の結果、日本には工業というものが存在しうるかどうかといった、まことに心細い時期であった。「大東亜戦争」にのるしがなく、工場をどんどん拡張して、敗戦の結果、工場もろとも何もかも失った私の父のような人間が沢山いたはずだ。私にとって『風景詩抄』や『大海辺』の諸篇は、失われた何ものかへの挽歌としても、占領下民主主義という時代への（得体の知れない）根源的否定としても受けとられたのである。たしかに作品は分析しがたいものをその底に藏していた。私もこの作品の「あすこ」に到達したいと思った。しかし、だいたい「あすこ」が現実的な場所か、非現実的な場所かさえ知りもしなかったし、「到達する」ということが、行動の上でか、信念の上でか、ということさえ混沌としていた。工業が発達し生産力が増大すれば、ファシズムであれ共産主義であれ、そういう場所になりうるだろうが……。

詩人飛鳥敬さんの古着屋の店が、大阪日本橋三丁目、焼跡の棟割バラック式マーケットにあつて、アメリカの中古衣類などをつるしていた。ここへは長谷川龍生などがしょっちゅう入りびたつて、詩誌「渦動」を発行し、それは一年に二号しか出なかつたが、議論ばかりは年中やつていた。ある時など、刑事がやつて来て、「あんたら何者や」と調べて行つた。「近所のやつらの密告や」と長谷川龍生は大いに憤慨した。私は中学同級生の梶祐輔といっしょにここに入入りしていたのである。

小野さんの詩の曖昧さについては、「渦動」の中でも強い不満があつた。私自身は、海の方のあの「誰もまだ到達しない」場所へ行くこと、そこから振り返つて見ることを「批評」というんだなと納得したが、小野さんの提出する「批評」という觀念は、私の内部で、ふしぎにも「生きる」こととはげしくからみ合つてしまつた。それだけではない、この時期以後、私の内面では重工業を物神化する傾向が、ちつとやそつとでは消えないことになる。いわば小野十三郎体験後遺症である。

あるとき、飛鳥さんだか長谷川龍生だかが、工業地帯の葦について語るのを聞いた。

「もうもうたる炭塵の降り注ぐ海岸の葦を折てみると、芯はまっ黒だ。それでも生きてゐる」

小松左京の『日本アパッチ族』と同類の発想で、ひいきの引き倒しもいいところだが、私は信じた。「渦動」の日々の中で、私はしだいに戦争中の工場動員体験と、戦後の小野十三郎体験を、奇妙な複合觀念につくり上げて行つた。そしてそれは、大阪市西部の諸構築物に対する特別の嗜好をはぐくんで行つたのである。

私自身その本質を理解しなかつたこの諸体験の複合物を、高橋は「重工業的世界観」と名付けてくれた。なんでこれが「世界観」であるかはわからなかつたけれども、当時の高橋は、異なつた世界観——マルクス主義に比肩する意味で「世界観」という命名を好んだのである。

その日、高橋はこんなふうに話した。

「『金属』という小説を書いたんや」

「……」

「いや、こんなこと言うてしまつて損したよ。みんな甘っころい小説ばかり書いてるだろうから、こんな思いもよらん、強烈な、質のちがう小説をぼくが出したら、おどろくだらうと思つてたんや……」

まず最初に、かれはこう言つて微笑した。

「だが……ほんとうの大阪つてのを知つてるかい？　ぼくは、ほんとうに大阪のど真ん中で生まれたんだ……。そりや凄いぜ。きみ知つてるかね、大阪のおそろしさを？」

「少しは知つてるつもりだ。あの住吉川や木津川下流、それに尼崎の海岸地帯、素晴らしいリズムがある」

「そりや、凄いんだ、きみ」

かれは、もういちど繰り返した。

……自分の家は、大阪で金属加工の家内工業を営んでいる。自分も時々工場に出てはたらく。ほとんど単調で苛酷で無意味にも思える繰り返し作業である。騒音と悲惨な長時間労働がもたらす精神の絶対的貧困は、すさまじいものだ。誰もそこから脱出できない。戦争は一時脱出の幻想を与えたものの、幻想は所詮幻想でしかなかった。夜中まで労働しなければ生きて行けない人々には、人間らしい怒りさえもないのだ。そういう土地は大阪の広大な部分を占めている。人は朝から飲酒し、でたらめに性交し、糞をたれて街角で死んで行く。

「うちの横っちの工場に硫酸槽がある。そこへいつか工員があやまって落ち込んだんや。どうなったと思う？ 何も残らなかつた。全部分解してしまつた。誰も目撃者がなかつた。だから、まる三日間全然わからなかつた。三日目に、ふしぎにも男の髪の毛がすうっと硫酸の表面に浮かんた……」

この種の怪談は私もいくつか聞いたことがあり、そう珍らしくもなかつたが、かれが語るとき、その土地に生きる人間としての迫力に満ちていた。

「いったい、それは何故か？ ……ぼくはその陰惨な運命を書いている」

それが『金属』なのであつた。

高橋がこうしたことを話してくれた日から三十余年の歳月が経過している。思いを凝らして記憶を探ろうとしても、明確な言葉としては何も浮かんでこない部分が多い。しかし、当時のメモを頼りに私が以上のように脈絡をつけた話は、あの日のかれが私に刻み込んだ印象から言えば、嘘ではない。聞きながら、黒ぶち眼鏡の奥で静かに微笑している双の目に、強く呪縛されて行く自分を感じていた。『金属』という小説が、果してその後完成されたかどうかは疑わしい。それはおそらく十八歳の時点でかれの構想した長篇なのであつて、その断片が切りとられて『片隅から』（改作されて『あの花この花』）になつたのではないか。これからの半年間は、かれにとってあまりにもあつたたく、しつたかな新体験の時代であつて、作者はこの本来のテーマから大きく逸脱した視野へよろめき出てしまつたから。

高橋はそれから、自分が「職業作家」を志していることを私に告げた。「職業作家」という言葉にわざとアクセントをつけないで、図太く言い放つという印象だつた。一瞬見せた真剣な表情の中に、人をためすといった底意があつたと思う。が、すぐにはにかなだような微笑にもどつた。そして、先